

反対咬合児における気道と顎顔面形態の 関連性について

○武元嘉彦, 佐藤秀夫, 窪田直子, 稲田絵美,
齊藤一誠, 岩崎智憲, 山崎要一

鹿大・院医歯・口腔小児

【目的】 反対咬合児の気道と顎顔面形態の
関連を明らかにする。

【方法】 側面頭部エックス線規格写真を用
い、正常咬合児群（27名 平均年齢7歳11
か月）ならびに反対咬合児群（25名 平均年
齢7歳10か月）間の気道形態と顎顔面形態
を比較した。また、反対咬合児群内の気道形
態と顎顔面形態との関連性を調べた。

気道は鼻咽頭気道と口腔咽頭気道を計測し、
顎顔面形態はS点を基準にフランクフルト平
面に平行な線をX軸に、これと直交する線を
Y軸として各計測点を座標値で評価した。

【結果】 気道については、反対咬合児群の
口腔咽頭気道幅（ $13.22 \pm 2.16\text{mm}$ ）が正常咬
合児群（ $10.91 \pm 1.93\text{mm}$ ）より有意に大きか
った。反対咬合児の気道と顎顔面形態との関
連性をみたところ、口腔咽頭気道幅の大きさと
ArのX座標値との間に有意な正の相関（ r
= 0.429 , $p < 0.05$ ）を認めた。

【考察】 反対咬合児の気道と顎顔面形態の
特徴として、口腔咽頭気道が大きく口蓋扁桃
肥大の可能性があることが示された。

反対咬合児で、口腔咽頭気道の大きさとAr
のX座標値との間に有意な正の相関を認めた
ことは、口蓋扁桃肥大が認められる反対咬合
児では、下気道の通気障害を避けるため舌な
らびに下顎骨が前方偏位をとるので、前脳頭
蓋底に対する下顎頭頸部の位置を示すArが
前方位となったと考えられた。また、口腔咽
頭気道の大きさと下顎骨前方部の前後的位置
を示す、B、Pog、Gn、MeのX座標に有意
な相関を認めなかったのは、下顎骨自体の大
きさによる場合と下顎骨の前方位による場合
があるためと考えられた。

小児の唾液曳糸性とう蝕との関連性

○比嘉 和、馬場篤子、柏村晴子、
豊村純弘、吉村 薫、本川 渉

福岡歯大 成育小児歯

唾液には抗菌作用など多種の生理機能が
存在し、口腔内の生体防御に重要な役割を果
たしている。唾液の成分には、個人差があり、
ストレスや口腔内環境によっても変化すると
言われている。また、歯科臨床では、う蝕病
原菌に対する抗菌因子や口腔乾燥および口臭
といった点からも唾液の性質に対する解明が
求められている。唾液の性状と口腔内環境と
の関連を把握するために、先人らによる様々
な研究が行われているが、小児での報告は少
ない。そこで今回、演者らは、唾液の性質の
一つである曳糸性とう蝕罹患性およびう蝕活
動性とがどのように関係しているのかを調査
し、検討を行った。

本研究では、本学小児歯科外来を訪れた小
児および成人を対象に試料を採取した。被験
者より採取した唾液は、NEVA METER®（石川鉄
工所社製）により曳糸性を測定し、う蝕活動
性試験（*streptococcus mutans*量、唾液緩衝
能、酸産生能）との関連性を調査した。また、
同時に食生活や口腔清掃法などのアンケート
を行い、被験者の生活環境について調査した。
その結果、興味ある知見が得られたので報告
する。